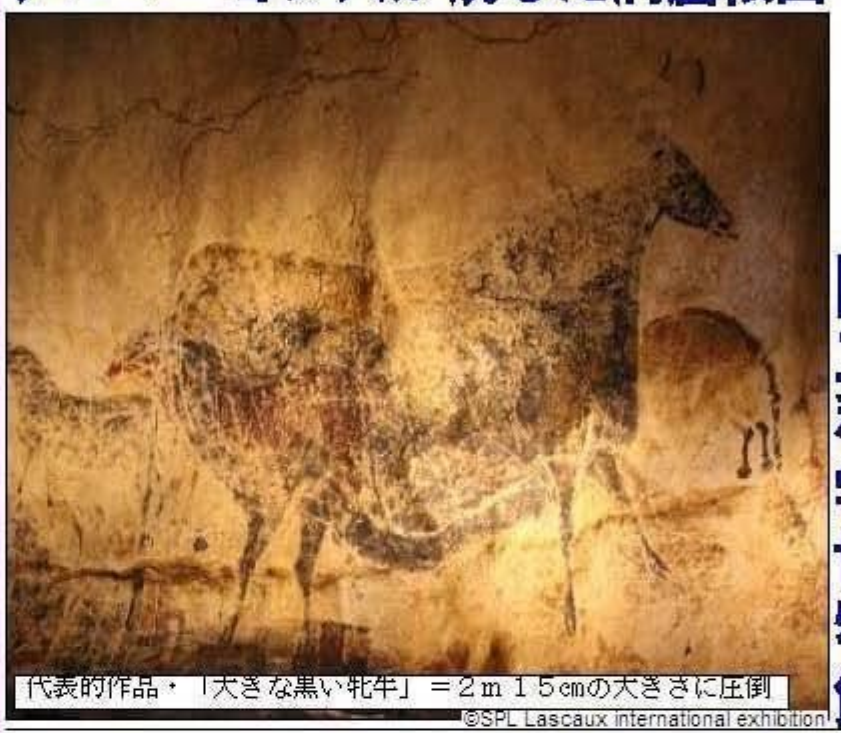
中央ぷれす

所在地
矢板市扇町2丁目1519
矢板中央高等学校
新聞部
TEL43-0447
FAX43-0899

本校新聞部が取材
プロの報道陣と一緒に
国立科学博物館
クロマニョン人が残した洞窟絵画



代表的作品・「大きな黒い牝牛」＝２ｍ１５㎝の大きさに圧倒

©SPL Lascaux international exhibition

11月1日から来年2月19日まで東京・上野の国立科学博物館で行われている特別展「世界遺産ラスコー展～クロマニョン人が残した洞窟壁画～」の報道内覧会が10月31日に行われ、本校新聞部も多くの報道陣と一緒に取材した。

内覧会は、国内外の新聞、テレビ局など報道陣が多数集まり、会場となった地球館特別展会場は熱気でムンムンしている。

本校新聞部員4人は記者の数に圧倒された。身を置くところもなく、あ然とした。

事前の打ち合わせで同博物館学習課の松本英和学校連携担当から「最初は遠慮がちになるし、報道関係者は学校生をうっとうしいと思う人もいるかも知れないけれど、頑張って」とのアドバイスや居合わせた年輩の女性記者から励まされたりして、何とか取材を進めた。

この企画展を監修した海部陽介同館人類史研究グループ長、五十嵐ジャンヌ東京藝術大講師は知識のない新聞部たちの質問にも丁寧に答えてくれた。一緒に取材している都立駒場高校の姿を横目で見ながら、カメラ担当は順調に撮影していく。2万年前のクロマニョン人の世界が再現された会場で、プロがどう取材するか興味があったが、あまりに大勢の報道陣でごった返し、何がなんだか分からないまま取材を終えた。

アクセサリーを付けた人骨

華やかにテープカット
特別展開会式

国立科学博物館「世界遺産ラスコー展～クロマニョン人が残した洞窟壁画～」の開会式は多くの関係者が集まる中、開催された。主催者を始めとする方々からの挨拶、監修者の紹介、テープカットが行われた＝写真。

林良博館長は「今回、ラスコー展の開催に多大なご協力をいただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます」と挨拶した。

その後、ティエリー・ダナ駐日フランス大使や毎日新聞社代表取締役朝比奈会長らが挨拶した。

部説
デフォルメされた美しい絵画
ラスコーの動物たちに魅了

新聞部といえば、取材し、記事を書き、パソコンを使って編集し、レーザープリンタで発行するという作業だ。でも気をつけることはたくさんある。校閲作業は最たるものだが、部員として苦手な作業としてイラスト描きがある。

以前、美術部にイラストを依頼したことがあったが、新聞部の要求する記事に合わせたイラストではなくて、けんか別れのような形で美術部との関係は思わしくない。その後、美術部が廃部となり、新聞部の誰かがイラストを担当して描いている。現在、イラストを担当しているが、同期の1年生の中で、一番絵が上手だからという理由だ。特別に上手なわけでないので、毎回苦しんでいる。コミックシートを使ったのも初めてだ。

そんな私が国立科学博物館の特別展「世界遺産ラスコー展～クロマニョン人が残した洞窟絵画～」プレス内覧会へ取材に行った。顧問の先生が、なぜ私を連れていくのか理解できないが、「あなたは記事を担当しているわけではないが、写真を撮ってください」とカメラを手渡され、東京行きの新幹線に乗った。

大勢のプレス関係者で内覧会会場は熱気に包まれていた。どこをどう撮ったらいいのかわからないので、あ然としたままいたら、隣りにいた年輩の女性記者から「遠慮しないでどんどん撮らないと駄目」と言われた。耳まで赤くなったが「ハイ」と小さく返事して、夢中でシャッターを何度も切った。

薄暗い中、ライトアップされた黒いウシ、背中合わせのバイソン、泳ぐシカなど2万年前の人が描いたと実感できない色とりどりの絵があった。デフォルメされて、より実物に迫まっているように思える。私の描くイラストが幼稚にみえる素晴しい壁画ばかりだ。私はどうしても対象をきちんと描かなくてはいけないという意識が強い。

ラスコーの洞窟壁画を見たからと言って、私の絵の技術が向上するわけでもなく、圧倒されただけに終わったけれど、写真を撮りながら、2万年の時を越えてクロマニョン人が私に乗り移って自由に描かせてくれたらと、強く願った。

ひがしはら

矢板中央高等学校新聞部ホームページ　http://ychyama.sakura.ne.jp/newstop.html

コラム『ひがしはら』は、国立科学博物館の都合により省略しております。

ラスコー展日本で実現でき嬉しい
海部陽介さん

国立科学博物館の人類研究部・人類史研究グループ長で、ラスコー展の監修者である。海部陽介さんは「4年前から準備をしていました。フランスでは広く知られているラスコー洞窟の壁画ですが、日本ではあまり知られておらず、洞窟壁画も日本国内では発見されていないため、あまり馴染みがないものです。早々、見られるものではないので、こんな素晴らしい形で実現できてうれしい」と会場となった地球館特別展会場で語った。日本公開で工夫した点について「ラスコー洞窟の壁画を楽しむことが出来るように、他では行われていない日本独自のコンテンツは「クロマニョン人の芸術世界の紹介と正体の解明。また、クロマニョン人がいた時代に日本列島にやってきた祖先の創造性の発揮についての展示を加えている」と解説する。また「その他にも、音声ガイドがあり、作品の説明やクイズなど大人でも子供でもラスコー壁画を楽しく見ることが出来るようになっているので、多くの人々にクロマニョン人が残した美しい壁画の数々を見に来てほしい」と訴えていた。

クロマニョン人絵画能力高い
五十嵐ジャンヌさん

今回の特別展覧会の本展監修者・学術協力者の一人である東京藝術大学講師の五十嵐ジャンヌさんは、ラスコーの壁画について「とても形が良いです。例えば馬の足の蹄と牛の蹄は数に違いがあるのですが、そのように細部へのこだわりが出てきています」とクロマニョン人の絵画能力がとても高かったのだろうと指摘した。

その他にも、展示されている壁画の中にある牛と20頭もの馬の絵が描かれている壁画・並びにラスコー最深部にある謎のトリ人間のある壁画について「様々な馬の動作や牛の下にある謎の記号などが細部にまで描かれています。また、明かりを消して特殊照明を当てることで浮かび上がる線刻画も幻想的」、一番深い「井戸の間」にあるバイソンと人とサイが登場する不思議な井戸の場面の絵について「壁画の中で唯一人間が描かれており、この鳥のような頭は仮面であり描かれている人間はシャーマンなのではないか」など多くの壁画の見どころを紹介した。

ラスコー洞窟壁画

背中合わせのバイソン
©SPL Lascaux international exhibition

ラスコー洞窟壁画はフランス南西部のドルドーニュ県にある。第2次世界大戦中の1940年9月12日に近くで遊んでいたモンティニャック村の子供たちによって発見された。

発見後はその壁画を見るために大勢の見物客が押し寄せた。

地下空間は全長約200㍍、地表下20㍍以内にあり、3つの空洞で構成されている。この洞窟にクロマニョン人たちは合計で850頭もの動物と多くの記号を残したという。

洞窟の内部環境が悪化し、壁画が急速に劣化したため、1963年に閉鎖。現在でも一般客が洞窟内に入ることは出来ず、非公開となっている。

写真は右から「背中合わせのバイソン」中央が「洞窟の1/10の模型」左上が「クロマニョン人頭骨」左下がいずれもレプリカだが、どれも本物そっくりに再現されている。なお、「体をなめるバイソン」は本物だ。

クロマニョン人はホモ・サピエンスだ

復元されたクロマニョン人
©SPL Lascaux international exhibition

クロマニョン人は1868年に南フランスのクロマニョン洞窟で、鉄道工事時に出土した5体の人骨化石に発端に付けられた名称だ。後期旧石器時代と呼ばれる4万2000年～1万4500年前頃のヨーロッパで住んでいた。身長の平均は男性で176㌢、女性で164㌢と大柄だ。

▽現代人と変わらない顔つきと姿

それぞれ実際に見つかっている化石人骨をもとに復元されている。この男性の骨格はシャンスラード遺跡、その左の女性はサン＝ジェルマン＝フ＝リビエール遺跡で発掘された。

▽毛皮の加工

クロマニョン人の石器には主に皮革加工に使われた道具があり、彼らが動物の皮を積極的に利用していたことがわかる。

▽多彩な狩猟具

クロマニョン人は、石や角を利用して様々なタイプの槍先をつくった。このような狩猟具の多様化は、ネアンデルタール人の文化には見られないものである。

▽貝殻のビーズをつけた頭飾り　女性

クロマニョン人の女性像に表現されていることや、一部の埋葬人骨に残っていたことから、このような飾りがあったことがわかる。

明かりで描く

スプーン型ランプ

真暗な洞窟内で絵がかけたのは、長さ22・4㌢の石でつくられたスプーン形のランプで明かりを灯したからだ。燃料は獣脂、芯としてネズノキの小枝を入れた。獣脂ランプをいくつも灯して、動物を描いたのだ。